

桂 枝 (けいし)

【処方用名】桂枝・川桂枝・嫩桂枝

【基 原】クスノキ科 Lauraceae のケイ *Cinnamomum cassia* Bl. の若枝またはその樹皮。

【性 味】辛・甘，温

【帰 経】肺・心・脾・肝・腎・膀胱

【効能と応用】

①発汗解肌

風寒表証の頭痛・発熱・悪寒・悪風などの症候に用いる。

表虚で自汗がみられるときは，白芍を配合して営衛を調和する。

方剂例 桂枝湯

表実で無汗を呈するときは，麻黄を配合し発汗を強める。

方剂例 麻黄湯

②温通経脈

風寒湿痺の関節痛に，羌活・防風・白朮・附子などと用いる。

方剂例 桂枝附子湯・桂枝加朮附湯・桂芍知母湯

営衛不足で生じる血痺のしびれには，黄耆・白芍などと用いる。

方剂例 黄耆桂枝五物湯

脾胃虚寒の腹痛には，白芍・膠飴などと使用する。

方剂例 小建中湯・桂枝加芍薬湯

血寒瘀滞による月経周期延長・無月経・月経痛などの症候には，当帰・赤芍・川芎・桃仁・牡丹皮・紅花などと用いる。

方剂例 温経湯

③通陽化気

脾陽不運による痰飲内停で背部の冷え・息切れ・めまい・動悸などがみられるときは，茯苓・白朮などと用いる。

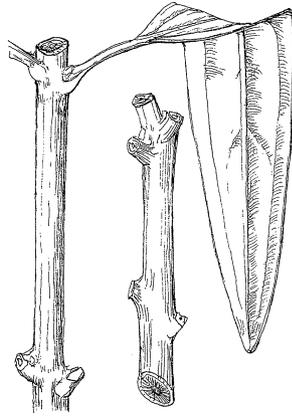
方剂例 苓桂朮甘湯

蓄水証すなわち膀胱の気化不行で水湿が内停し小便不利（尿量減少・排尿障害）を呈するときは，茯苓・猪苓・沢瀉などと使用する。

方剂例 五苓散

胸陽不振による狭心痛・動悸・脈の結代などの胸痺を呈するときは，栝楼・薤白などと用いる。

方剂例 枳実薤白桂枝湯



④平衡降逆

心気陰両虚で脈の結代・動悸がみられるときは，炙甘草・党参・生地黄・麦門冬などと用いる。

方剂例 炙甘草湯

下焦の陰寒が心陽虚に乗じて上衝する奔豚気^{ほんとうき}で，臍下から塊状のものがつき上がるように感じるときは，白芍・甘草・大棗などと使用する。

方剂例 苓桂甘棗湯・桂枝加桂湯

臨床使用の要点

桂枝は辛甘・温で，主として肺・心・膀胱経に入り，兼ねて脾・肝・腎の諸経に入り，辛散温通して気血を振奮し営衛を透達し，外は表を行って肌腠の風寒を緩散し，四肢に横走して経脈の寒滞を温通し，散寒止痛・活血通経に働くので，風寒表証・風湿痺痛・中焦虚寒の腹痛・血寒経閉などに対する常用薬である。また発汗力は緩和であるから，風寒表証では有汗・無汗を問わず応用でき，とくに体虚感冒・上肢肩臂疼痛・体虚新感の風寒痺痛などにもっとも適している。このほか，水湿は陰邪で陽氣を得てはじめて化し，通陽化気の桂枝は化湿利水を強めるので，利水化湿薬に配合して痰飲・蓄水などによく用いる。また，陽氣衰微・陰寒内停による気逆喘咳・気衝奔豚に対し，通陽化気により平衡降逆に働く要薬である。

【参 考】

①白芍に配合すると，表虚の外感に対しては営衛を調和し解表して発汗しすぎることがなく，虚寒に使用すると温陽和裏・緩急止痛に働く。

麻黄・附子に配合すると温経散寒・止痛に，茯苓・白朮と用いると通陽利水・温化痰飲に，当帰・白朮に配合すると活血通経に，杏仁・厚朴に配合すると降気止咳に働く。

桂枝は心の血分に入り，甘温で助心陽に働き，炙甘草との配合で動悸を鎮める。

②桂枝の発汗力は麻黄に劣るが，温経散寒の効力はかなり強い。麻黄は辛開苦泄により主に衛氣を宣発し，腠理を開いて発汗し寒邪を散じる。桂枝は辛甘温煦して主に営氣を透達し，解肌発汗して風邪を散じる。それゆえ，風寒の邪が営衛を傷害し腠理が閉塞した表実無汗には麻黄が適し，桂枝を配合することにより発汗を扶助し，営衛不和の腠理粗鬆による表虚有汗には桂枝が適し，白芍を配合することにより調和営衛・解肌散邪するのがよい。

③日本では桂枝と桂皮（肉桂）の区分があいまいで，エキス剤では桂皮を桂枝として使用しており，薬効上問題である。

【用 量】3～10g，煎服。風寒湿痺の疼痛には15～30gを用いることがある。